

## 編集後記

『哲学の探求』第36号が無事刊行の運びとなりました。2008年度フォーラムのレクチャーを引き受けていただいた三先生と、七名の個人研究発表者の方々より力作の寄稿をいただきまして、今号も質・量共に充実した内容で仕上げることができました。また、今回の寄稿者の皆さんには、お忙しい中早めに原稿をご提出いただけただけ上、編集からの執拗な誤植の訂正、疑問、記号類や書式についての質問などに対しても、丁寧に対応していただきました。合わせて心よりお礼申し上げます。また、他のフォーラム世話人の皆さんにも、版下のチェックに細かく付き合ってください、多くの誤植を発見していただいたことを感謝いたします。

私自身はこれまで、論文の体裁やスタイルといったものに対しては知識もこだわりも持っていませんでしたので、今回の組版作業は勉強しながらの作業でした。時間の制約もあって所詮は付け焼刃の勉強でしたし、Microsoft Word というアプリケーションの機能を活用しきれなかったところもあり、最終的な版面の仕上がりに対して自信を持てるまでには至りませんでした。この勉強と作業の過程はなかなか楽しいものでした。(そこに楽しさを見出してしまったがために、却って執筆者の皆さんへのお伺いが執拗さを増してしまい、ご迷惑をおかけしてしまったのではという危惧もありますが。) この楽しさには学術的なところも多分に含まれていたとは思いますが、次のような事情もあります。体裁やスタイルというのはもちろん約束事ではありますが、スタイルの選択は文書の有用性を左右しますから、ここにも一定の合理性が関わってきます。他方で、一切の慣習的な側面を排した完全に合理的な体裁やスタイル、というものは全くのナンセンスでしょう。哲学をやっていると、合理性というものが慣習や自然とは全く別のものであるかのような感覚を覚えることがあります。組版のようなことをやっていると、慣習と合理性というのがそれほど遠く離れたものであるようには思えないというわけです。このことは今号所収のいくつかの論文のテーマと関連しており、次回のテーマレクチャーにも関連すると思うのですが、その話はまた別の機会に。(編集担当 山田竹志)

---

### 哲学の探求 第36号

2009年5月10日 発行

編 集	山田 竹志
発 行	哲学若手研究者フォーラム
	総務 森 功次
印刷・製本	平河工業社

---